

# 新児童舞踊運動の文化的意義

——— 児童舞踊の沿革 ———

雨 ケ 崎 俊 子

## は じ め に

舞踊の中の一つの分野としてわが国独自のものに児童舞踊がある。日本における児童舞踊は、明治5年学制<sup>1)</sup> 発布以来、学校教育として育まれてきた特色を有している。明治から大正の初期まで現状維持のまま移ってきた舞踊（遊戯）が、その後大正中期に発生した童謡に振りをつけて踊る童謡舞踊（後に児童舞踊とよばれる）として広く普及し、後代の学校舞踊に甚大な影響と刺激を与えた。これは民間舞踊家の活躍によるもので、外国にその類例を見ない独特の発達をし、独自の世界を作っている。

現在、日本には社団法人全日本児童舞踊協会<sup>2)</sup> があり、その会員は300名を越えており、各自が研究所を持ち生徒をもっている。各研究所では活発にステージ活動をして作品の発表を行っている。一方に於いては各地方を巡回して学校・幼稚園の教師を対象に児童舞踊を指導しており、舞踊界に一大勢力を成している。

本研究は、児童舞踊が誕生する原動力となった新児童舞踊運動の文化的意義を考察するに当たり、先学の研究成果を踏まえ、その時代や社会を背景とする当時の文化との関係を探ることによって、研究課題を一層明瞭にしようとするものである。

## 1. 明 治 時 代

明治初期の寺子屋式学校の休憩時その他に遊戯が行われていたが、男子は競技を主とする遊戯、女子は羽根つき、まりつき（わらべ唄に合わせて）、かるた遊び位のものであった。巷では江戸時代からの手振（唱歌遊戯の一種）が行われており、古典日本舞踊の教授が民間にはあったが、これ等は児童を対象として行われたとしても、児童舞踊とは別の意味であった。また、各地に盛んに行われた盆祭礼等の行事の舞踊を見ても、児童は大人に伍して、大人の唄や踊りを演じたに過ぎず、真に児童を対象とした舞踊ではなかったといっていよい。

学校教育では、明治元年当時、ドイツのヤーン、グーツムーツの体操や、スウェーデンのリングの体操が世界的に風靡していたが、日本では、剣術・体操・水泳が行われており、男子を本位とする寺子屋式のものであり、女子に関する舞踊的なものは何もなかった。明治5年学制発布と同時に唱歌と体術が入り、明治6年体術が体操と改められた。舞踊的教材が正式に「唱

歌遊戯」となって現われたのは、明治8年、愛知県尋常師範学校の伊沢修二から、文部省に「唱歌遊戯採用<sup>3)</sup>」を建議しているその中に、「唱歌遊戯」と記載されている。建議は「将来學術進歩ニ付須要ノ件・唱歌遊戯ニ関スル件：唱歌ハ精神ニ快樂ヲ与ヘ、運動ハ肢体ニ爽快ヲ与フ、コノ二者ハ教育上並ビ行ハレテ、偏重スベカラザルモノトス。而シテ運動ニ数種アリ、方今体操ヲ以テ、一般心行ノモノト定ム、然レドモ年齢幼弱、筋肉軟柔ノ幼生ヲ激励セシムルハ、其害敢テ少カラズト、是レ有名諸家ノ説ナリ、故ニ今、下等小学教科ニ遊戯ヲ設ク。唱歌遊戯「椿」「胡蝶」「ねずみ」等」とされている。

遊戯は、明治14年5月公布の「小学教則綱領<sup>4)</sup>」において、体操の内容としてとりあげられている。しかし、どのような遊戯かについての具体的指示はみられない。明治18年に坪井玄道が「戸外遊戯法」を著しているが、この書の中に「此の法に関して未だかつて一書を著せるを見ず<sup>5)</sup>」といっている。井上は小学校で主に低学年において課せられたものであり、全体的に研究がされていないと指摘している。その後、尋常師範学校や高等女学校にも遊戯が採用され漸次隆盛を呈している。日本体育会の65年史<sup>6)</sup>によると、明治26年同会の落成式に総裁閑院宮の令旨を賜わり、伏見、有栖川、東伏見、山階、久邇、加陽、梨本、北白川、小松、華頂各宮の台臨の元に、陸軍軍楽隊の伴奏によって女生徒の「唱歌遊戯」を台覧に供したとされている。同書によると、日本最初の体操専門教員の養成所であった同会は、明治32年「動作遊戯」の講習会を開催している。

明治30年代に入って「遊戯」に関する研究が盛んに行われた。このことは遊戯に関する著書の数からみても明らかである。すなわち明治31～40年の間に体操書36冊に対して遊戯、ダンスの書が64冊になっている<sup>7)</sup>。井上は遊戯の研究が盛んになった理由は、普通体操の発展性に乏しい教材とその教授法、指導原理の乏しさなどに対する反動的なものを挙げている。一方、普通体操を育ててきた坪井玄道自身が明治35年に仏、独、英の体育を研究して帰朝し、当時ドイツで行われていた舞踏や行進遊戯を紹介した。当時ドイツでは、グーツムーツのドイツ体操と、スウェーデン体操が理論闘争を開始しており、スウェーデン体操が女子体育法として脚光を浴びてドイツ式に再編成された時に遭遇していた。ドイツでは、素朴で自然なフォークダンスが古典舞踊の輪舞に交代して登場した時期であった。相次いで川瀬元九郎、井口あぐりがアメリカからスウェーデン体操を学んで帰朝した。同年当時東京女子高等師範学校の 高橋忠次郎が「日本遊戯調査会」を組織して雑誌「唱歌と遊戯」を発刊し<sup>8)</sup>、白井規矩郎は同人の主催する「遊戯法研究会」より遊戯に関する書を出版している。

当時現場においては、体操や遊戯に関し、いずれをとるべきかについて混乱した状態があらわれた。これらの混乱に対して文部省は、学校体操のとりべき方針を確立するため、明治37年「体操遊戯調査会<sup>9)</sup>」を設置し調査することになった。調査会では、広範にわたる問題がとりあげられており、38年11月に報告書が出されている。遊戯に関する内容は、甲ー学校ニ於テ奨励スベキ遊戯、乙ー学校外ニ奨励スベキモノ、丙ー禁止スベキモノに分けられ、この時以後、舞踊的教材が正課体育に認められるようになった。

明治期は、欧米を範とした学制発布以来、日本の体育指導者たちが次々と欧米へ留学し、新しい体育を導入し、学校体育が形成されていく時期であった。その中で舞踊的教材はすべて「〇〇遊戯」と称され実施されており、日本人の創作による唱歌遊戯は、いわゆる歌詞表現の

アテ振り」と称する歌詞の意味を物真似式に表現したものであり、歌詞全体の意を表現したものではない。これは日本舞踊の表現形式の影響を多分に受けたものであったと考えられる。フォークダンスの輸入後における学校体育に（舞踊の教材であった唱歌遊戯に）対する影響は、外国式な表現形式を教え、形式、内容共に大きく作用をおよぼした。明治時代全体を通じて、児童舞踊は、学校体育の一部として補助的教材としての役割に終始したといっていよい。

## 2 大 正 時 代

大正年間、関東大震災によって中心都市が崩壊された。日露戦争の後を受けてさらに日本は第一次世界大戦に参加し、国家主義的な社会情勢の中で学校教育（体育）は体練に化していった。一般生活は戦争によって好景気を招来し、生活は物心ともに相当の余裕ができていた。このことが文化方面に好影響をもたらした。子女教育の面にも反映した。当時、健康と子女の教養として舞踊を習得させる機運が抬頭した。

児童舞踊の歴史が、とりもなおさず学校舞踊の歴史であることは本期も同じである。明治後半においては体操界に種々の問題があったが、先に記した体操遊戯調査研究会の研究結果に基づいて、大正2年「学校体操教授要目<sup>10)</sup>」が制定された。この要目は、学校体育に関する初めてのものであり、これによって学校体育の方向が具体的に示された。全体的に見ると、体操中心の要目であり、その体操はいわゆるスウェーデン体操がその主流をなしている。この要目によって遊戯は、競争遊戯、行進遊戯、動作遊戯の三種類に分類されており、いわゆる舞踊に関するものは、行進遊戯と動作遊戯の二つに大別されている。行進遊戯については、十字行進、踵趾行進、方舞の教材例を挙げ、動作遊戯については、「渦巻」「池の鯉」「木の葉」「大和男児」等の教材例を示している。注意として「以上は遊戯の主たる種類を例示せるに過ぎず、実際の教授に当たりては、適宜増減なすべし」とあり、体操教練についてはその指示が精神明確であるのに対し、遊戯の位置づけは不明確であり漠然としている。取り扱いにおいては、土地の状況や環境によって増減せよと弾力的なものであったことがわかる。この弾力性が要目外の教材研究となり、民間舞踊家の活動を促し、いわゆる「要目準拠学校遊戯講習会」が全国的に活発に行われた。当初は要目の伝達指導がすべてであったが、やがて補充教材の必要に迫られ、その創作と理論の裏付け研究へと発展するに従い、これまでの教材の吟味、目的の検討等が民間舞踊家の手によって行われるようになった。

第一次世界大戦の終わり頃の社会情勢は、世界的な思想の変化が起こり、日本でも創造的、自由発想を尊重する進歩的思想をもつものにより大正7年頃には、婦人と教育の問題が社会的な大きな課題として起きてきた。教育の面では文化人や教育者などの進歩的な知識階級によって、新教育と、芸術教育の運動となって表面化した。芸術教育運動は主として、作家、画家、詩人、作曲家、舞踊家等の芸術家から起こり、進歩的な新教育運動に立ち上がった学校が協力し、大正9年頃には全国的な大きな運動となった。その中心的な役割を果たしたのは大正7年鈴木三重吉によって創刊された児童雑誌「赤い鳥<sup>11)</sup>」である。ここでは、文学精神に立った芸術的な作品が「童謡<sup>12)</sup>」と名づけられて発表された。赤い鳥には、北原白秋、泉鏡花、西条八十等詩人、作家らにより童謡の創作を発表した。これは児童性を尊重した口語による歌を民間

の詩人の手で創作しようというもので、いわゆる「童謡運動」を起こし児童文学運動の先端をきった。大正8年には「こども雑誌」および「金の船」が相次いで創刊され、三木露風、野口雨情、若山牧水らが盛んに童謡の創作を発表する等、児童詩の芸術化運動は形態を備えるに至り、この新しい児童詩は「童謡」と称される。童謡詩人たちと世代を同じくする一群の音楽家たちにも、児童芸術を創造しようとする機運が高まっており、弘田竜太郎、本居長世、中山晋平他すぐれた音楽家たちによって童謡詩に曲をつけ、美しい童謡が全国に滲透していった。詩人たちによって灯された童謡運動の火は、音楽家たちの協力によって高められていった。

一方、一般舞踊界では、明治末期の坪内逍遙の舞踊改革運動、劇場組織の変革、外国舞踊家の来訪等により、日本舞踊の伝統を反省し、新しい日本文化にふさわしい舞踊が創造されようとしており、一般社会も漸く、芸術に、教育に、日常生活に舞踊を導き入れようとする動きが起きていた。民間の洋舞研究家印牧季雄、土川五郎、日本舞踊系の真島睦美、藤間静枝、林きむ子等が、新時代の脚光を浴びて起こった童謡に作舞し始めた。これは日本の子供達の生活感情を表現した子供のための舞踊を創作することにあつた。これが童謡運動と合流し、「新児童舞踊運動<sup>13)</sup>」が抬頭する。この運動が全国的に普及し、一連の先覚者達は講習や講演に東奔西走し全国に滲透した。

さらにこの期の新しい考え方として、リズムを取り上げその指導を強調したリズム教育がある。この主張は、ダルクローズのリトミックが小林宗作によって紹介されたのを始め、白井規矩郎の韻律体操、土川五郎の律動遊戯等の呼び方にも表われている。リズム教育について「リズムは人体の筋肉運動に依存する。その基調をなすものは常にリズムである。即ち「肉体の運動はリズム感覚から引き離しては考えられない<sup>14)</sup>」と主張している。印牧季雄は大正13年発行の著「学校遊戯創作の理論と実際」の中に、リズム教育の重要性を提唱し、女子体育に美を主張しリズムが肝要であることを説いている。

大正期は、国家主義的状况から自由な社会情勢の変化に伴い、児童舞踊は童謡運動の勃興、次いで新児童舞踊運動が抬頭し、子供の踊りの芽生えた時であり今日の児童舞踊としての誕生期であるということが出来る。これまで学校体育を母体として育まれた児童舞踊は、時代の変遷と共に変化し、この期に児童舞踊の独自性が備えられたことは芸術教育運動(児童舞踊運動)によるところであり、その意義は大きいと考える。

### 3. 昭和時代

#### 第二次大戦前の児童舞踊

昭和8年印牧季雄がドイツより帰朝後、ドイツのノイエ・タンツの理論および実際<sup>15)</sup>を学校方面に伝え、学校舞踊に革新的影響を与えた。クラシック・バレエに対抗して興ったドイツのノイエ・タンツは、①リズム生活の適切な指導、②個性の尊重、③表現の自由、④自然性を尊び、⑤創作力を育て、⑥人間育成の手段とし全人教育をなすことを力説した。以上の事項をみると、舞踊は全人教育を目的としていることがわかる。ノイエ・タンツの導入によって舞踊教育の観念が変革した。児童舞踊も、フォークダンス、体操、バレエ、日本舞踊等の基本テクニックの集成に過ぎなかったが、ノイエ・タンツの息吹を吸収することによって新しい作品分野

を開拓し、内容的に変化しはじめる。

大正末期に勃興した児童舞踊は急速な発展を遂げている。その中核をなしたのは古典日本舞踊家中の一部革新派であり、古典洋舞家中の先覚者たちで、児童舞踊家が出現した。児童の舞踊人口が急増すると共に専門の指導者数も増加し、研究所は東京、大阪の大都市から次第に全国の中都市へと拡張された。研究所は独立の建物を持つもの、ビルの一室や個人家屋の一室を充てるなど、児童・中学生を対象に練習日を設け、他に指導者の養成を行うのが通例であった。各種の催しの招きに生徒を出演させ、研究所独自の発表や公演を行う等研究所は隆盛をきわめた。

昭和13年頃特に有識者階級の家庭において舞踊は子女の教養として考えられるようになり、舞踊学校の誕生を促すことになる。土川五郎による大森音楽舞踊学校、印牧季雄、柿沢充等講師による中央音楽学校舞踊科が設置され、児童以外にも成人の部が盛んになる。舞踊発表の会場も大正12年の関東大震災以来、東京はその復興に全力を注いでいたが、舞踊界、音楽界その他の要望に応じて公共施設、新聞社、百貨店等相次いで公演会場を建設した。作品発表の場を得て児童舞踊は一層内容を充実させ、観賞層を拡大した。

児童舞踊の伴奏にレコードを使用するようになったのは昭和初期であるが、舞踊を習得し、発表するための必需品となった。レコード会社は、童謡レコードに舞踊振付の解説を詩と共に添付し、児童舞踊専門の舞踊家を専属に迎えるまでに発展していった。大正末期に創設されたNHKのラジオ放送は、昭和時代になって全国に普及がはかられ、昭和5年には児童舞踊劇が現場中継放送され、昭和8年には音楽劇場等の放送に加えて「リズム遊び」の放送が取り上げられる等、当時相当な反響と話題を呼んだ。ラジオ放送やレコードが普及したことも舞踊人口を増加させた。

### 第二次大戦中の児童舞踊

昭和12年7月に勃発した日中戦争は年と共に拡大し、遂に昭和16年12月太平洋戦争の勃発を招来した。緒戦における日本の勝利は児童舞踊界までも興奮の渦中に巻き込み、他の一般と同じく戦争一色に塗り変えられた。社会のあらゆる面が戦時統制下におかれるようになり、舞踊界も既設諸団体は発展的解消を命じられ、全舞踊界を一丸とする「大日本舞踊連盟<sup>17)</sup>」が結成された。これ以来、国民精神作興運動のもと戦意を昂揚する舞踊がほとんど連日のように各所で公演された。その他工場慰問、戦地慰問団として各地に派遣された。昭和17年内閣情報局は戦時体制を一層強固にするため児童文化の統合を行って「少国民文化協会<sup>18)</sup>」を結成した。文学、演劇、映画など数分野の中に児童舞踊も包含され、名称も「少国民舞踊」として統一された。

大戦の進展は日本を次第に不利な立場に追い込んで行ったが、昭和18年東京の空襲を転機として、建築物の疎開、舞踊家の召集によって児童舞踊の研究所は次第に縮小し、昭和19年夏に行われた全国主要都市の強制的学童疎開によって完全に研究所活動は中断された。ただ、この間に空襲を避けて地方に疎開した一部の舞踊家たちが、その地方において児童舞踊の普及活動を続けていた。

戦時下の教育は、昭和16年国民学校令<sup>19)</sup>が公布され、従来の小学校は国民学校に改められた。国民学校の教育目的は「皇国ノ道ニ則リテ、初等普通教育ヲ施シ、国民ノ基礎的錬成ヲナス」

ことにあった。国民学校の初等科、高等科では体操科が体錬科に改められ、体操と武道が科目とされた。「但し女兒については武道を欠くことを得」となっている。

体錬科体操は、体操、教練、遊戯競技及び衛生の四つの領域からなっている。「体操及び遊戯競技」の中に、「音楽遊戯は、歩走力、跳力、体の支配力等身体的錬磨に資し、快活優美なる心情を培う」とし、特に巧技の末に走って体錬的価値を逸脱することのないよう注意している<sup>20)</sup>。戦時下においては、舞踊は全く危機にさらされにといわざるを得ない。

### 第二次大戦後の児童舞踊

昭和20年8月第二次大戦は日本の敗北によって、わが国のあらゆる面に大変革をもたらした。敗戦、それに続く占領、国内の混乱、外地におけるあらゆる活動の停止、これらはいまだかつてみない大変動であり、しばらくの間は事態收拾の見通しもつかない状態にあった。

敗戦と共に疎開児童は再び都会に戻り、戦後3年を経た昭和23年頃には従来の児童舞踊の指導者たちが復帰し、それと同時に新しい指導者たちが誕生して活躍をはじめた。戦前の研修生のほとんどは児童舞踊の修業過程において趣味の範囲を出なかったが、戦後はこれを自己の職業に資するために修業しようとするものが増加した。指導者達は児童文化の復興を団結の力で成し遂げようとする機運が高まり、昭和23年毎日新聞社の後援によって「全日本児童舞踊家連盟<sup>21)</sup>」を結成した。指導者達は児童舞踊家という芸術的職業観念を樹立し、他の舞踊芸術と一線を画した。このことはややもすると他の舞踊芸術に従属視されていた児童舞踊は、児童芸術の一分野として地位を確立したことを示している。昭和24年には一時中断された東京新聞社の舞踊コンクールが再開され、舞踊界全般に対して大きな発展的役割を果たしている。特に児童舞踊界では、コンクール形式による創作発表の場を得たことによって、児童舞踊家たちは自己の創作力を世に問おうと競い合い、創作活動も広い視野に立って行われる等その発展は目覚ましいものがあつた。戦後の混乱期にバレエ（クラシック・バレエ、モダン・バレエ）が流行し、同じ頃フォークダンスも再興した。バレエは4～5年間続き大衆から遊離していったが、フォークダンスは演技的滲透力をもって大衆の各層に広がっていった。児童舞踊界もこの影響を多分に受け、フォークダンス的な児童舞踊は運動会用教材等として現在に及んでいる。昭和28年にはテレビ放送が開始され、児童舞踊界はテレビによって新たな市場性を獲得し、その普及力を高めていった。

現在、「全日本児童舞踊家連盟」は「社団法人全日本児童舞踊協会」と改められ、全国的な諸行事を開催し盛況を極めている。その会員（研究所）は活発にステージ活動を行い、また学校、幼稚園の教諭を対象に指導する等、独自の分野を形成し舞踊界に一大勢力を有している。

敗戦後、民主主義国家への更生と文化国家への道を憲法によって明らかにした日本の教育は、新しい民主主義教育への歩みをふみ出した。昭和22年6月文部省は「学校体育指導要綱<sup>22)</sup>」を公布し、教育の試案を示した。これにより昭和16年以来用いられてきた体錬科は体育科と改称された。明治以来の遊戯がダンス（中学校・高等学校）、リズム遊び・リズム運動（小学校）となり、名称の改変は舞踊本来の特質が教育に認められるようになったといえよう。昭和24年9月「学習指導要領小学校体育編<sup>23)</sup>」が出版され、さきの学校体育指導要綱の具体的な問題が明らかにされた。学校教育においては依然として舞踊の名称は用いないが、児童の発達段階を重視し、カリキュラム構成も学年に区分されており、低学年（1・2・3年）－模倣物語遊び、

高学年（４・５・６年）ーリズム遊び（運動）と示されている。その後、小学校学習指導要領は幾度か改訂されて今日に至っている。改訂の都度体育も多少の変更はあるが、舞踊に関する運動領域（現行は表現運動）の名称の変化は著しく目立っている。昭和28年には低・中学年ーリズムや身振りの遊び、高学年ーリズム運動、昭和33年には低・中・高学年ーリズム運動、昭和44年には低・中・高学年ーダンス、昭和55年には低学年ー基本の運動（模倣の運動）、中・高学年ー表現運動と称している。名称の変化は体育の目標や内容の改善に伴うものであり、また舞踊の内容の深浅によって名称を異にしたものと考えられる。中学校・高等学校ではダンスと定められ、創作とフォークダンスを内容として行われてきている。28年小学校学習指導要領に示されたリズム運動の内容は<sup>24)</sup>、「フォークダンス」と「経験の表現と基礎リズム」の二つに大別しており、「経験の表現と基礎リズムは、美的表現の経験とその技能を深めることである。……基礎リズムは主として表現と結びついて、よりよい表現を生む手がかりとする……」とされている。戦後における学校舞踊の意義、目的は、思想・感情を身体を通して美的運動によって表現することであり、舞踊本来の本質にふれた意義へと変遷していると見ることができる。

明治以来社会情勢により時に盛衰の波はあったが、今日まで体育と舞踊とは密接な関係を持って続いているといえよう。

## ま と め

児童舞踊は時代の社会的情勢によってさまざまな影響を受けつつ、児童舞踊の形態を整え発展した文化的な意義を考慮しながらその沿革を明らかにした。即ち、明治期全体を通して児童舞踊は体育の一部として補助教材的役割に終始した発芽期であった。大正期には一躍して民間の識者から起きた革新的な児童舞踊運動によって、学校依存一辺倒の児童舞踊は学校教育外に出ることになり、著しく社会性を帯びるようになる。これらの揺籃期を経て、昭和期の戦前には児童舞踊家の活発な活動によって隆盛期を迎える。一時戦争で中断された活動は、戦後児童芸術の中に児童舞踊の分野を確立し、独自の児童文化を発展させた。

児童舞踊運動の文化的意義を考察するため、明治以降の社会と文化の中での動きを概観することが今回のねらいであり、児童舞踊運動に携わった人々の主張・活動、児童舞踊の内容等を明らかにすることが今後の課題として残されている。

## 引用・参考文献

- 1) 文部省、学制百年史資料編、帝国地方行政学会、1981、p.11－29.
- 2) 社団法人全日本児童舞踊協会編、児童舞踊70年史、全音楽譜出版社、1987.
- 3) 社団法人全日本児童舞踊協会編、前掲書、p.15.
- 4) 井上一男、学校体育制度史増補版、大修館、1970、p.68.
- 5) 井上一男、前掲書、p.68.
- 6) 社団法人全日本児童舞踊協会編、前掲書、p.15－16.

- 7) 今村嘉雄, 近世日本体育概史, 日本体育社, 1953, p.48.
- 8) 社団法人全日本児童舞踊協会編, 前掲書, p.16, 67.
- 9) 井上一男, 前掲書, p.69-72.
- 10) 井上一男, 前掲書, p.75-81.
- 11) 社団法人全日本児童舞踊協会編, 前掲書, p.52-53.
- 12) 社団法人全日本児童舞踊協会編, 前掲書, p.54-55.
- 13) 社団法人全日本児童舞踊協会編, 前掲書, p.30-31.
- 14) 社団法人全日本児童舞踊協会編, 前掲書, p.50.
- 15) 社団法人全日本児童舞踊協会編, 前掲書, p.19.
- 16) 郡司正勝, 日本舞踊における早期教育, 舞踊学 11-2, 1988.
- 17) 社団法人全日本児童舞踊協会編, 前掲書, p.37-39.
- 18) 社団法人全日本児童舞踊協会編, 前掲書, p.40.
- 19) 井上一男, 前掲書, p.120-134.
- 20) 井上一男, 前掲書, p.128.
- 21) 社団法人全日本児童舞踊協会編, 前掲書, p.42.
- 22) 井上一男, 前掲書, p.146-154.
- 23) 井上一男, 前掲書, p.161-245.
- 24) 文部省, 小学校学習指導要領体育科編, 昭和28年改訂版, 1954, p.144-146.

(平成2年1月受付)